

# はじめてのソーシャルスキル

## —その1：幼児期からはじめるアスペルガー症候群の社会参加支援プログラム—

Learning social skills for the first time :  
A group for preschoolers with Asperger's syndrome

日戸 由刈<sup>1)</sup>・本田 秀夫<sup>2)</sup>・須田 恭平<sup>1)</sup>

Nitto Yukari, Honda Hideo, Suda Kyohei

### 1. はじめに

アスペルガー症候群（以下、「AS」）の子どもは、「心の理論」<sup>2)</sup>の不全など特有の心理特性を示すため、通常であれば自然に身につけるはずの社会的な価値観や態度を、一般の養育や教育の環境の中で形成することが困難である。このことは青年期以降の深刻な不適応の要因となり得る<sup>3)</sup>。

本研究の目的は、幼児期に早期発見されたASの子どもに対して、学齢期以降に生じ得る不適応の予防を念頭に置いた早期介入技法を開発することである。基本的なソーシャルスキルの獲得を図るためにわれわれが開発した『はじめてのソーシャルスキル』プログラムの概要を以下に報告する。

### 2. プログラムの概要

『はじめてのソーシャルスキル』プログラムは、4～5歳のASの幼児とその親を対象とする。基本的なソーシャルスキルをはじめて用いる場を構造化することで、子どもに成功体験を持たせ、スキルの習得だけでなく社会参加や仲間づくりに向けた社会的な価値観や態度の形成を促進することをめざしとする。また、幼児期のうちから親が子どもの社会的相互交渉や興味の持ち方の特徴に気づき、適切な接し方を体得することもめざしとする。家庭で親子一緒に課題に取り組む形式をとるが、少人数の集団療育の場を連動させることによって、効果を増強することができる。

本プログラムは療育機関や支援センター、保健所などで行われている少人数の集団療育の中に組み込み、年間を通して実施できる。1年を導入期、期、期、期にわけ、4つの基本的ソーシャルスキルに対応させたサブプログラムを段階的に実施する。その際には、家庭で親子一緒に取り組む宿題を併用する。

本プログラムで取り上げる基本的ソーシャルスキル、実施手順、指導内容を以下に述べる。

#### 2.1 基本的ソーシャルスキル

筆者らは学齢期以降の臨床経験の蓄積を基に、ASの子どもにとって社会参加の鍵となる基本的ソーシャルスキルをいくつか想定した。ASの子どもに、通常の人たちと同じ心理メカニズムでこれらを獲得させることは困難かもしれない。しかし、まずは行動の次元で獲得を促し、日常場面での成功体験の蓄積を図ることによって、価値や態度の形成を促進することは可能かもしれない。

われわれが想定した基本的ソーシャルスキルは、大人との「合意」、相手の気持ちに着目した「向社会的行動」<sup>1)</sup>、家庭や小集団における「役割分担」、仲間の発言に対する「傾聴」の4つである。本プログラムでは、これに対応させた4つのサブプログラムを開発し、それぞれ「はじめての共同作業」、「はじめての贈り物」、「はじめてのお手伝い」、「はじめての仲間づきあい」と名付けた。「はじめての共同作業」は導入期に実施し、大人との合意体験を図る。「はじめての贈り物」は期に実施し、相手の嬉しい気持ちに注目させながら、行動の次元において向社会的行動の獲得を促す。「はじめてのお

1) 横浜市総合リハビリテーションセンター  
医療課診療係

2) 横浜市総合リハビリテーションセンター  
医療課長

手伝い」は Ⅲ期に実施し、家庭での役割分担の体験を図る。「はじめての仲間づくりあい」は Ⅲ期に実施し、仲間の発言への傾聴を促す（表 1）。

表 1 4つのサブプログラム

サブプログラム	ねらいとする基本的ソーシャルスキル	実施時期
はじめての共同作業	大人との「合意」	導入期
はじめての贈り物	「向社会的行動」	I期
はじめてのお手伝い	家庭での「役割分担」	Ⅱ期
はじめての仲間づくりあい	仲間への「傾聴」	Ⅲ期

## 2.2 実施手順

各サブプログラムはそれぞれ以下の5つの手順に沿って実施する。

- (1) 親との面接：われわれが独自に開発したテキストを用いて、療育者は各サブプログラムの獲得目標、具体的な課題や手順を親に説明し、見通しと意義の理解を促す。
- (2) 療育場面での動機づけ：療育者は実物呈示や実体験を通じて、療育場面で子どもに対する課題の動機づけを図る。これは、親にとっては療育参観を通じた子どもへの接し方のモデル呈示となる（図 1.1）。



図 1.1 テーブルふきの実体験

- (3) 家庭での実践：療育場面で子どもに「宿題」を呈示し、家庭での親子の実践を促す。宿題の内容は、制作やチェック表記入など、ASの子どもにとってわかりやすく、目に見える形で仕上げられるように工夫する（図 1.2）。

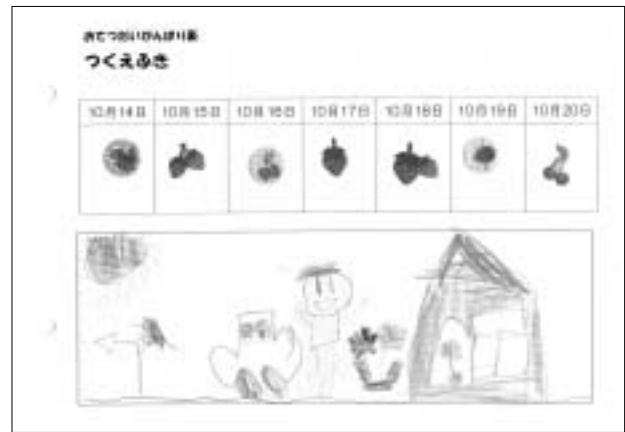


図 1.2 子どもの「宿題」

- (4) 療育場面で子どもが報告：家庭で実践した宿題を、子どもが療育者や他児に見せて報告する時間を療育中に設定する。皆から注目され、ポジティブなフィードバックを得ることによって、子どもに達成感を持たせ、社会的な価値感や態度の形成と内在化を図っている。療育場面でのわが子の様子を見ることは、親の達成感にもつながる（図 1.3）。



図 1.3 「宿題」の報告

- (5) 「ふりかえりシート」の記入：親が記入したふりかえりシートをもとに、療育者は親と面接を行い、各サブプログラムの目標到達度を確認する。親は宿題で難しさを感じた点や必要な工夫のふりかえりを通じて、子どもの特徴に対する理解を深めていく（図 1.4）。



図 1.4 「ふりかえりシート」

### 2.3 各サブプログラムの内容

各サブプログラムには、子どもにとっての目標と親にとっての目標が設定されている。以下にそれぞれの目標、内容、テキストの一部を紹介する。

#### 「はじめての共同作業」(図 2.1)

簡単な工作や「生活習慣チェック表」づくりに親子で取り組む課題である。目標は、子どもにとっては大人との共同作業を通じて合意の成功体験を持つこと、親にとってはわが子の特徴を理解し、子どもに歩み寄るかたちで合意の成功体験を支える意義を実感することである。

このサブプログラムは、1年間の中で導入期に実施する。共同作業を通じた親子の合意は、一見するとやさしいように見えるが、実はとても難しい課題である。子どもが手伝ってくれた親の存在をまったく意識できない場合や、逆に親が自分のしたいことを一方的に子どもにさせようとする場合もしばしばみられる。療育者は親に対して事前にあまり多くを説明せず、親子で作品を完成させた後で、療育場面で子どもの反応を見ながら親と一緒にふりかえるプロセスを特に大切にす。親が子どもの特徴について理解を深め、子どもに歩み寄るかたちで合意する姿勢を形成することが、その後のプログラムの効

果増強につながると考えるからである。

#### 「はじめての贈り物」(図 2.2)

簡単なプレゼントづくりや年賀状づくりや、完成した作品を相手に渡すことを親子で取り組むという課題である。目標は、子どもにとっては「自分が何かをしたら、相手が嬉しい気持ちになる」ということがあることへの気づきを促すこと、親にとっては、そうした子どもの気づきを促すために、贈り物をつくる際や、それを渡す際に、子どもが相手の気持ちに注目できるような工夫や準備の必要性を実感することである。

#### 「はじめてのお手伝い」(図 2.3)

テーブルふきやタオルたたみなど、家庭での簡単なお手伝いを親が子どもに促し、お手伝いが終わったら親子でチェック表にシールを貼るという課題である。目標は、子どもにとっては分担された役割の手順を自分で判断し、親から促されなくても自分で取り組む意欲を促すことと、お手伝いが終わった後には親に報告して一緒にチェックする習慣を持つことである。親にとっての目標は、子どもが手順を自分で判断できるための教え方の工夫や事前練習の必要性を実感することである。

#### 「はじめての仲間づきあい」(図 2.4)

子ども同士の集いの場を大人が設定し、それぞれが持ち寄った「見せたい物」を交代で見せ合う課題である。これは学齢児を対象としたCOSST<コスト><sup>4)</sup>で開発した「趣味の時間」というプログラムの幼児期版である。ASの子どもにとって同世代の仲間との相互交渉は最も難易度の高い課題であるが<sup>3)</sup>、AS特有の興味を題材に用いることにより、子どもの参加意欲を高めることができる<sup>5)6)</sup>。実際、ASの子どもたちはとても楽しんでこの課題に参加している。目標は、子どもにとっては自分の見せたい物を仲間に見せるだけでなく、仲間の見せたい物にも注目し、仲間の発言を傾聴する態度を促すことである。親にとっての目標は、療育終了後も地域の中で仲間づきあいを維持・発展できるように、親同士が集いの場を計画し、そこでの子ども同士の相互交渉を円滑に進めるための技術を習得することである。



### 3. 考 察

『はじめてのソーシャルスキル』は、基本的なソーシャルスキルをはじめて用いる場を構造化することで、子どもに成功体験を持たせ、スキルの習得だけでなく社会参加や仲間づくりに向けた社会的な価値観や態度の形成を促進することをねらいとする。本プログラムの効果を増強する要因は、次の2点である。

1点目は、療育場面で課題に対する動機づけを子どもと親の両方に十分に図ることである。4～5歳のASの子どもの場合、家庭で親がリードして子どもと一緒に課題に取り組むということには、少なからず困難が伴う。この困難を療育場面で少しでも取り除くことによって、家庭での実践が促進され、子どもと親の両方にとって達成感が持ちやすくなる。

2点目の要因は、導入期における親子の合意体験を十分に図ることである。とはいえ、幼児期にはASの子どもの自分から相手に歩み寄ることはとても難しい。プログラムの導入期には、まず親が子どもの特徴を理解し、親が子どもの側に歩み寄るという形で合意を成立させる体験から始める。親子で合意する成功体験が蓄積されることが、その後の基本的ソーシャルスキルの獲得の仕方に大きく影響するものと思われる。実際にプログラムを体験した母親たちの感想からも、導入期における親子の合意体験の意義が報告されている。

本プログラムで期待される基本的ソーシャルスキルの習得は、一般の人と同じ心理メカニズムを伴うものではない。しかしASの子どもにとって、たとえば行動の次元であっても、相手との合意や向社会的行動、役割分担、仲間の発言への傾聴などのスキル習得に成功する体験を積むことは、学齢期以降の不適応を予防し、円滑な社会参加や仲間づくりにつながると期待される。本プログラムの効果を多数例で検証すること、および汎用性を高めるためのマニュアル作成が今後の課題である。

〔第49回日本児童青年精神医学会総会

(2008年11月4日～7日、広島市)にて発表〕

### 参考文献

- 1) Eisenberg N & Mussen P: The roots of Prosocial behavior in children. Cambridge University Press, 1989 (菊池章夫、二宮克美 訳: 思いやり行動の発達心理. 金子書房, 1991)
- 2) Frith U: AUTISM: Explaining the Enigma. Basil Blackwell Ltd., 1989 (富田真紀、清水康夫 訳: 自閉症の謎を解き明かす. 東京書籍, 1991)
- 3) Howlin P: Autism: Preparing for Adulthood. Routledge, 1997 (久保紘章、谷口政隆、鈴木正子 監訳: 自閉症 成人期にむけての準備 能力の高い自閉症の人を中心に. ぶどう社, 2000)
- 4) 日戸由刈、清水康夫、本田秀夫、萬木はるか、片山知哉: アスペルガー症候群のCOSSTプログラム - 破綻予防と適応促進のコミュニティ・ケア - . 臨床精神医学34(9): 1207-1216, 2005.
- 5) 日戸由刈、本田秀夫: 療育. 精神科治療学23(増): 107-112, 2008.
- 6) 日戸由刈、萬木はるか、武部正明、片山知哉、本田秀夫: 「4つのジュースからどれを選ぶ?」 - アスペルガー症候群の学齢児に集団で「合意する」ことを教えるプログラム開発 - . 精神科治療学24(4): 493-501, 2009.